

【詩の種類】

■詩は「用語上、形式上、内容上」と、大きく三つの種類に分類することができる。

内容上			形式上			用語上		種類	特徴
叙事詩	叙景詩	叙情詩	散文詩	自由詩	定型詩	口語詩	文語詩		
歴史上の事件や人物などを客観的にうたった詩。	自然の風景などを写生的・客観的にありのままに描写する詩。作者の心情より「風景や風物の描写」に重点が置かれており、視覚的な要素が強く、絵画的になる。	作者の感動や心情、メッセージが込められた詩。	短い語句ですぐに改行せず、散文（普通の文章）のように文を続けて書く詩。	音数に一定の決まりがない詩。	音数に一定の決まりがある詩。 七五調（七音と五音のくり返し）や五七調（五音と七音のくり返し）でうたわれているものが多い。	現代に使われている言葉（口語）で書かれた詩。	昔に使われていた古い言葉（文語）で書かれた詩。		

■口語詩と文語詩について

・学年が下がるほど、口語詩であっても馴染みのない言葉や熟語等が多く使われていると文語詩であると捉え違える傾向が強い。文語の言い回しに慣れるため、文語体のことわざや慣用句、また、俳句や短歌等にもある程度親しんでおくことよ。

■定型詩について

・文字数と音数とを混同している生徒が多い。音数を数えるには、文字を平仮名に改めて字数を数える。
・俳句や短歌に「字余り」や「字足らず」があるように、一部音数が崩れていても、全体として一定の音数によるリズムが保たれているのであれば定型詩である。

■七五調と五七調について

・七五調はやわらかく流れるようになりリズムを生み、「女性的」と形容される。また、五七調は重々しく力強いリズムを生み、「男性的」と形容される。

七五調：私の耳は 貝のから・海のひびきを なつかしむ

五七調：名も知らぬ 遠き島より・流れ寄る 椰子の実一つ

■叙情詩と叙景詩について

・自然の風景が描写されていても、「作者の感動や心情」が中心にうたわれている作品や「作者のメッセージ」が込められている作品は叙情詩と判断される。自然の風景や風物にのみとらわれて機械的な判断をせず、あくまで詩の内容や鑑賞によって判断できるようにしよう。

・自然の風景が中心に描写されていても作者の心情がどうしてもにじみ出てしまうため、叙景詩を叙情詩に含める考え方もある。

■叙事詩について

・アイヌ伝説の「ユーカラ」や、中世の「平家物語」、「太平記」などが叙事詩の性質を強くもつ。

■その他

「用語上の種類」と「形式上の種類」とを合わせて、「口語自由詩」、「文語定型詩」などと呼ぶ場合がある。

【詩の表現技法】

6	5	4	3	2	1	
擬人法	比喩 ひゆ	倒置法	対句 ついく	連	行分け	表現技法
人間でないものを、人間がしたことのように表し、鮮明な印象を残す。活喩法ともいう。	「たとえ」ともいう。性質の似た他の何かに言い換えることで印象を鮮明にし、わかりやすくする。	言葉の順序をかえることで、意味を強調したり感動を強く訴えたりする。	内容の対立する言葉や似た言葉、対照的な言葉などを並べて、調子を整えたり感動を強調したりする。	内容上共通する何行かをまとめて、一連とする。散文(普通の文章)での段落に当たる。	文を短い語句で区切って改行し、情景や感動の高まりを生き生きと描く。	意味と効果
菜の花が風によすられてうなずきながら聞いている ※「人間ではない主語」と「人間の動作」を組み合わせることで表現されていることを確認しよう。	①直喩(明喩) きりきりともみ込ぶような冬が来た ※「ようだ・みたいだ」が用いられる。 ②隠喩(暗喩) いちようの木も簾(ほうき)になった ※「ようだ・みたいだ」が用いられない。	どうだろう この沢鳴りの音は ※本来の語順は「この沢鳴りの音はどうだろう」である。	美しい妹をもつ人 女の友をもつ人 妻を持つ人	はれわたたりたる このあさのあやうさ	うまれるまえはきつと みなみのしまにさいた あまいかおりにみちた はなびらだつたみたい すずめがとぶ いちじるしいあやうさ	例

12	11	10	9	8	7
中止法	押韻 おうえん	省略法	呼びかけ	反復法 (くりかえし)	体言止め
文をいったん止めた形で表現し、余情を残す。	行の終わりに、またははじめに同じ響きの音を置いてリズムを生み、印象を強める。	あるべきはずの言葉をわざと省き、すべてを言いきらずに文を終えることで余情を残し、印象を強める。	呼びかけるような言葉を用いて親しみの気持ちを表し、印象を強める。	同じ言葉や、ほぼ同じ表現を二度以上繰り返したり、調子を整えたり、感動を強調したりする。リフレインともいう。	「名詞止め」ともいう。文末を体言(名詞)で止め、印象を強め、余韻を残す。省略法の一つ。
育ちながらゆれ。 よるひるを生にめざめ。 ※生(せい)：生きていること。いのち。	②脚韻 野ゆき山ゆき海辺ゆき 真ひるの丘(おか)べ花をしき ※行の終わりを「き」の音でそろえている。	①頭韻 君(きみ)が瞳(ひとみ)はつぶらにて 君(きみ)が心は知りがたし ※行のはじめを「き」の音でそろえている。	波の後ろを走る波…… 波の前を走る波…… ※点線「……」や棒線「—」で示されることが多い。 ※右の例は「対句」にもなっている。	ああ、自然よ 僕を一人立ちにさせた広大な父よ	母馬子馬、ぬまの岸、 夏の夕(ゆづ)の柳(やなぎ)かげ ※余韻とは、言外に感じさせるしみじみとした味わいのこと。余情。 冬よ 僕に來い、僕に來い、 僕は冬の力、冬は僕の餌食(えじき)だ